

# 史跡寺ノ浦石器時代住居跡 範囲確認調査のあらまし



史跡内の様子。地面を掘ると出てくる石を用いて土留めの石積みを築き、段々畑が構築されている。

## 史跡がおかれている現状と調査にいたる経緯

史跡は三方ヶ峰の南緩斜面に立地しており、地表面に巨大な岩塊が顔を出している礫層です。石が多い土地柄ですが、地元の人々は現地でとれる石を積み、階段状の農地を作り出しています。現在、史跡内では葉物野菜を中心に作付けされており、一部は耕作放棄地です。周辺は農地ないし山林で、近年、太陽光発電設備が設置されている箇所がある等、景観の破壊が危惧されています。

地域の貴重な財産である史跡を守り伝えるためには、その価値、重要性を正しく認識するとともに、広く周知していく等、様々な対策が必要です。しかし、調査実績が乏しく縄文の漠然とした集落像しか掴めていなかったため、これまで具体的な保存活用の方針を打ち出せないままでした。

指定より80年以上経った今、寺ノ浦遺跡は半ば放置されたような状況を改善して、地域の発展のため活用していくことを検討する時期にあり、そのためには保存活用計画の策定が必要になります。そこで、小諸市教育委員会は、遺跡の現状を把握し保存活用計画の基礎資料を収集することを目的に、範囲確認調査を計画し、平成26年に着手しました。

# 史跡調査履歴

## 昭和5年度の調査

縄文時代後期の敷石住居跡が発見されました。当初は1軒と考えられていましたが、<sup>ろ</sup>炉が2つあり、規模が大きいことから、現在では2軒の住居が重なっていたと考えられています。

## 平成26年度の調査

史跡指定区域外（指定地の北側）を調査。縄文時代のものと思われる土坑が2基と平安時代の住居跡が1軒発見されました。遺物は縄文時代中期末から後期初頭の土器が多く出土しています。

## 平成27年度の調査

史跡指定区域の西端を調査。縄文時代中期後葉から後期の住居跡が12軒発見されました。発見された住居跡のうち4軒は敷石住居跡でした。

## 平成28年度の調査

史跡指定区域の南西域及び指定区域外（指定地の南西側、谷の縁辺部まで）を調査。縄文時代中期後葉から後期の住居跡が5軒発見されました。また、史跡指定区域の南端に設定したトレンチで、拳大の礫が詰まった集石土坑が複数、発見されました。このトレンチでは住居跡と認められそうな遺構がなく、また、称名寺式期（縄文時代後期初頭）の大型土器と思われる破片が散乱していました。

## 平成29年度調査

史跡指定区域の北端を調査。縄文時代中期後葉の住居跡を3軒、発見しました。いずれも南に入口を持つ柄鏡型敷石住居跡と考えられ、うち1軒では居住部と入口張出の連結部に加曽利E3式（縄文時代中期後葉）の埋甕が確認されました。

## 平成30年度調査

史跡指定区域の南端及び東端を調査。縄文時代中期後葉の住居跡が2軒と土坑が発見されました。



平成26年度調査風景



平成27年度調査風景



平成28年度調査風景



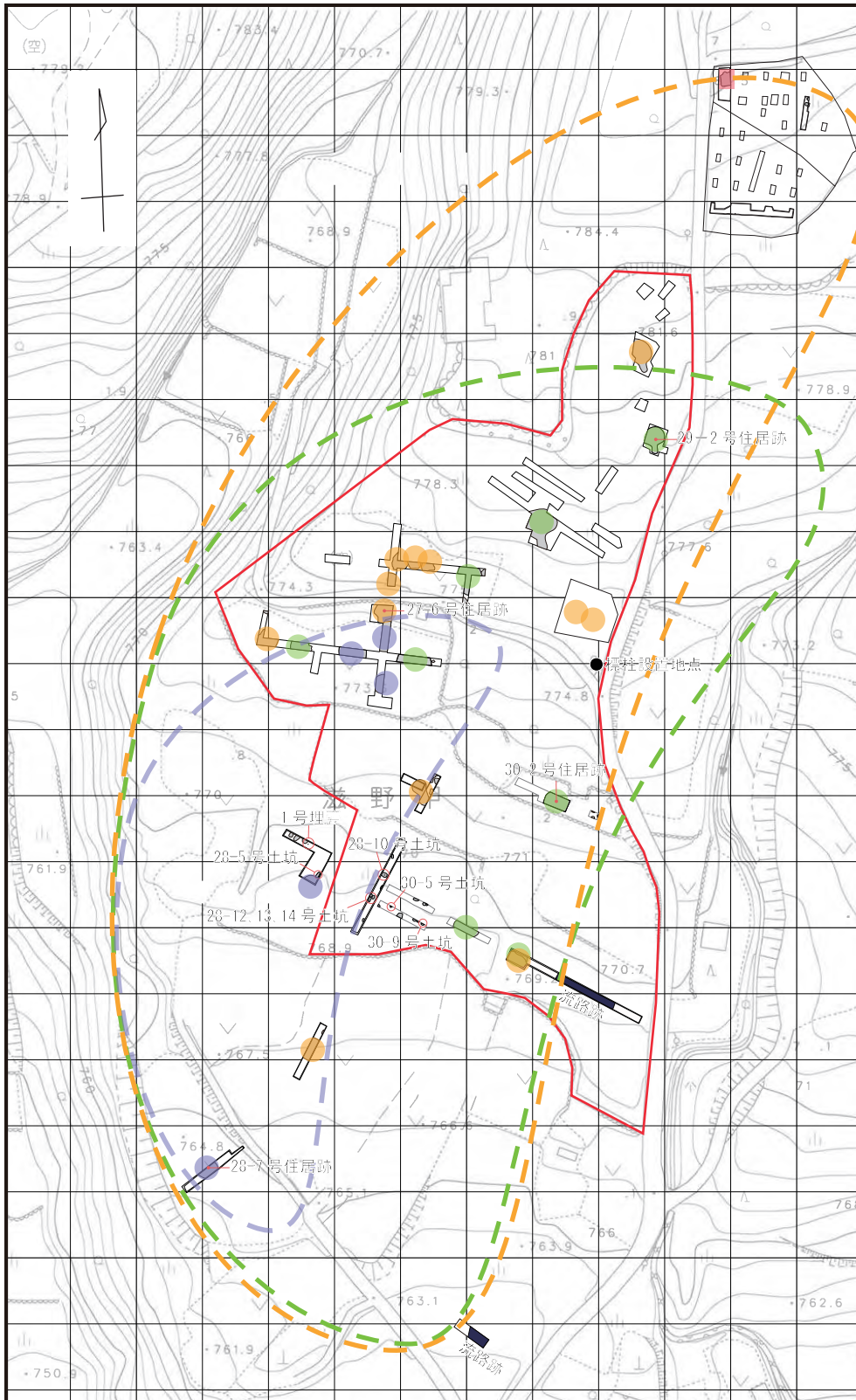
平成29年度調査風景



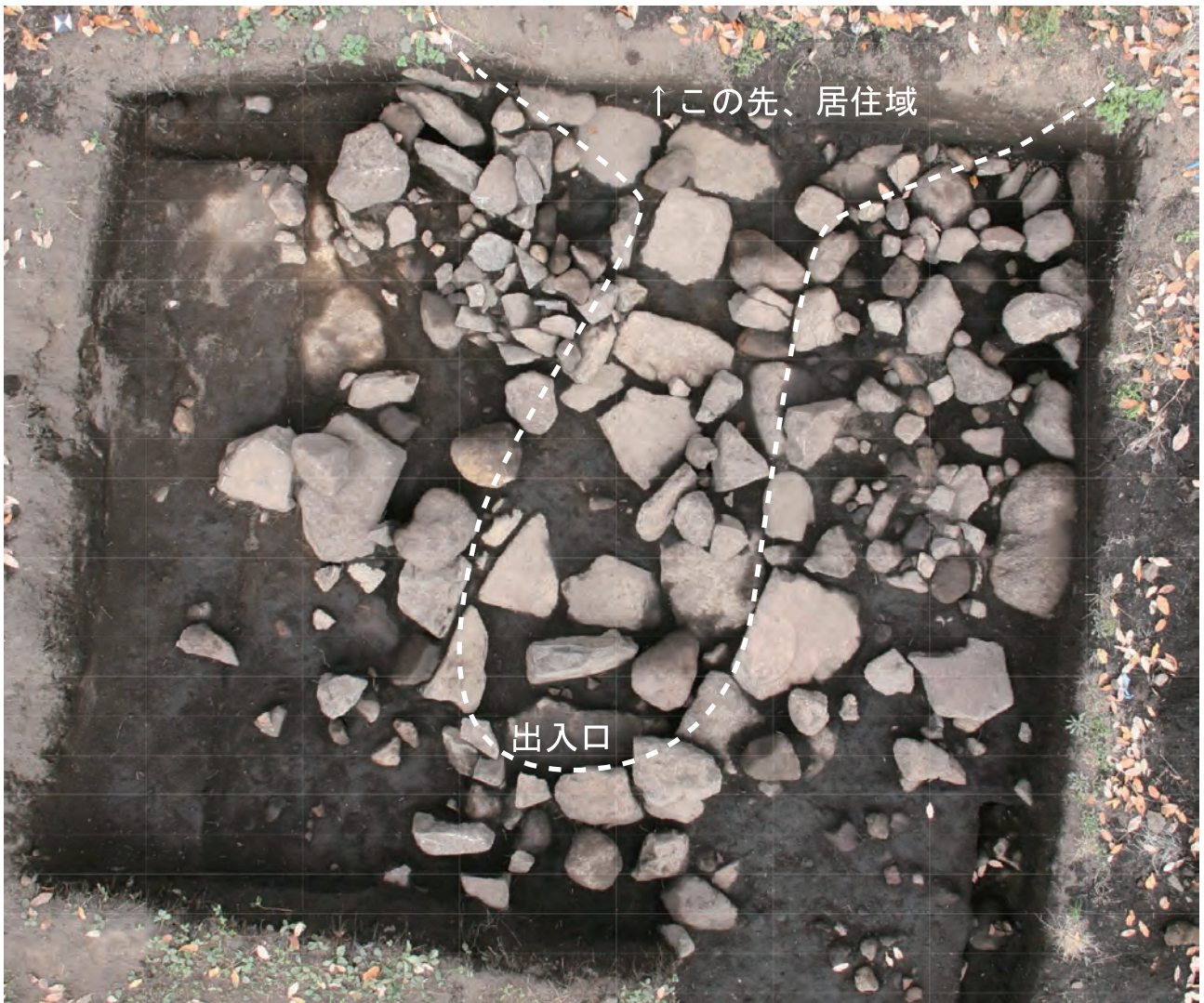
平成30年度調査風景

# 寺ノ浦石器時代住居跡調査全体図

縮尺 1 : 400



- 史跡指定区域線
- 加曾利E2式からE3式古段階の住居跡
- 加曾利E3式新段階からE4式段階の住居跡
- 称名寺式から堀之内式段階の住居跡
- 平安時代の住居跡
- ※破線は各時期における集落の想定範囲



## 敷石住居跡の発見

敷石住居は床面の一部もしくは全体に平たい石を敷く、縄文時代の住居の一形態です。こういった住居は縄文時代中期後葉から後期前半にかけて、関東・中部地方に分布しています。

敷石住居の中には出入り口部分を張り出させたものがあり、その形が柄のついた手鏡えかがみがたしきいしじゅうきよに似ていることから、柄鏡型敷石住居と呼んでいます。

敷石住居が各地でつくられる時期と寺ノ浦遺跡の存続年代は重なっており、今回の調査でも多くの敷石住居跡や、かつてはそうこんせきだったのではないかとと思われる痕跡こんせきが見つかりました。

27-6号住居跡（後期）。柄鏡型敷石住居跡の入口が検出された。居住域が埋蔵されていると思われる場所は、現在、道として使用されているため、調査範囲の拡張は行わなかった。



29-2号住居（中期後葉：加曾利E3式期）。入口部分に敷石があり、埋甕を2つ持つ。埋甕1は敷石の下に埋納されている。炉跡もあり、床が真っ赤に焼けている。居住域に敷石がないが、最初から敷いていなかったのか、後で取り除かれたのかは不明。なお、この住居跡の覆土から緑泥片岩製の石棒のかけらが出土している。

## 調査成果と今後の展望

平成の寺ノ浦石器時代住居跡範囲確認調査では、史跡の価値を再認識するのに十分な成果を得ることができました。

遺構は、浅いところで現在の地表面より10cmから20cm掘り下げたところで発見されています。ほとんどは後世の土地改変による影響で上部が当時の状態を保っていませんが、下部は不完全ながらもしっかりと保存されており、縄文時代中期後葉から後期前半の住居跡、土坑のほか平安時代の住居跡が認められました。また、出土した遺物は、大量の縄文土器、石器、土偶、土製円盤、石皿、多孔石、石棒、平安時代の土師器はじきとバラエティに富んでいます。

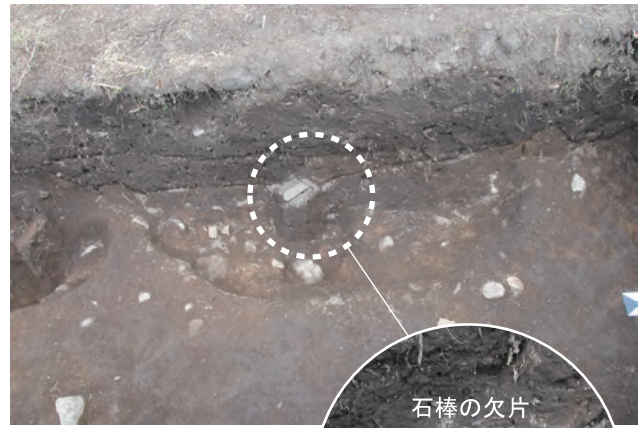
縄文時代に限ってみますと、今回の調査で見つかった住居跡で最も古いのは、縄文時代中期後葉の加曾利E2式期に該当するものです。この時期から集落の形成がはじまり、時代が下るにつれて徐々に規模を拡大させています。最も新しい住居跡は縄文時代後期前半の堀之内式期のもので、この時期より新しい住居跡は見つかりませんでした。

地形や遺構ぼていけいの分布、土器等の散布状況を検証すると、寺ノ浦遺跡じょうもんしゅうらくの縄文集落は、ややいびつながら馬蹄形になるのではないかと想定されます。

範囲確認調査で得られた成果は、今後、さらに詳細な検証を加えて明らかになったことを本報告書にまとめていくとともに、これを資料として史跡の保存・活用を図っていくこととなります。



30-5号土坑



30-9号土坑



28-5号土坑

## さまざまな土坑<sup>どこう</sup>

土坑は地面に掘られた穴のことをいい、用途はごみ捨て場であったり、何かを貯蔵したものであったり、墓穴<sup>はかあな</sup>であったりと、様々です。そのため、土坑の中には土器や石器など当時使用していた道具が入っていることがあります。

今回の調査でたくさんの土坑が見つかりますが、史跡の中であることから保存のために多くは形や分布<sup>ぶんぷ</sup>の確認<sup>とど</sup>に留め、いくつか選んで掘り下げてみました。



### 集石土坑

集石土坑は史跡指定区域の南側にまとまって発見された。長軸が1m程度の大きさで、1基だけ半分掘ってみたが、拳大の礫が詰まっているだけであった。遺物も入っていなかったが土坑の周囲には後期初頭、称名寺式期の大型土器片が散らばっていた。他の遺跡の事例から集石墓の可能性もあり、詳細な検証が必要である。



集石土坑を半分掘りあげたところ。

## 出土した縄文時代の道具類

今回の調査では、縄文土器、石器、土偶、土製円盤  
石皿、多孔石、石棒といった多種多様の遺物が出土し  
ています。これらは当時の人々が使用していた生活道  
具、あるいはおまつりのための道具で、たとえ破片資  
料であっても遺跡を知るための重要な手がかりとなり  
ます。

調査中に発見された遺物の中で、遺跡の分析に必要  
になりそうなもの、また現地保存が難しそうなもの  
については、遺跡より採集しました。



縄文土器（中期後葉：加曾利E2式）



縄文土器（中期後葉：唐草文系か）



30-2号住居から出土した縄文土器（中期後葉：加曾利E3～4式）





縄文土器（中期後葉：郷土式）



縄文土器（後期初頭：称名寺式）



縄文土器（後期前半：堀ノ内式）

どせいひん  
**土製品**



**土製円盤**

土器を打ち欠き、側面をこするなどして、円形に仕上げたもの。実際のところ何のための道具かわかっておらず、おまつりの道具、玩具など様々な説があるほか、何かの作業に土器片を使用し続けた結果、円形になっただけではないかという考えもある。



**土偶**

頭部、左腕、下半身を欠いた中期後葉の土偶。今回の調査で出土した土偶はこの1点のみ。もっとも浅間南麓は土偶の出土が少ない傾向にあり、寺ノ浦遺跡も同様にあまり土偶を持たない集落であったのかもしれない。

## 石器・石製品



だせいせきふ  
打製石斧



こがたませいせきふ  
小型磨製石斧



石皿  
木の実などを粉砕する道具。遺跡より出土する石皿は意図的に割られていることがある。



多孔石  
全体に無数の穴が穿たれている石。クルミなど堅い木の実を割った痕跡ではないかともいわれているが、不明な点が多い。



石棒（破片）



これも石棒？  
長さはマッチ棒程度で、非常に小さい。両端までしっかりと研磨が施されている。自然のものではなく、人の手により棒状に加工されているので、石棒として判断した。